

### 「芋粥」の位置：『宇治拾遺物語』の作者像

益田, 勝実 / MASUDA, Katsumi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

27

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

9

(発行年 / Year)

1982-12-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019346>

# 「芋粥」の位置

—『宇治拾遺物語』の作者像—

## 「芋粥」ばなしのまえ

芥川龍之介が「芋粥」を書くころ、『宇治拾遺物語』をどんなふう読んでいたのだろうか。いまのわたくしの読みかたとどう違うか。そんなことをあてずっぽうに考えても仕方がないが、彼が巻第一のいちばん終わり、第十八話の「利仁芋粥の事」という話に特に関心をよせ、あの話のなかの五位という人物の心理の推移の過程を詳しく想像しているのだから、この説話集のなかの話のひとつひとつを単位として、これは実におもしろい、というふうに読んでいったことは、ほぼ確かだろう。わたくしも、もとは、『宇治拾遺』の話のひとつづつを独立したものととして、読み興じていたけれども、どうもそれだけではすまされなような気がして、話から話へのつづきぐあいを読みとって、おもしろく思うようになった。

## 益 田 勝 実

巻第一の「利仁芋粥の事」のまえ、第十七話は、「修行者百鬼夜行にあふ事」である。今は昔、ある修行者が津の国へ行き、日が暮れたので無人の古寺の竜泉寺というのに泊った。夜なかばかりに、一つ目だの角が生えているのだの、手ごとに火をともしてもった異形の者が集まってきた。百人ばかり。恐しくてたまらないが、仕方がないので坐ってじっとしていると、一人坐る場所がない異形の者が、火をかざして修行者の顔を照らし、「我が居るべき座に、新しき不動尊こそ居給ひたれ。今夜ばかりは外におはせ」といって、片手で彼を引さげて、堂の縁の下に据えた。夜明け近くなって、異形の者たちはガヤガヤと帰っていった。明けはなつのを待って、見回すと、なんと、あつたはずの寺もなければ、昨日はるる歩いてきた野原もない。あきれているところへ、運よく馬に乗った人たちが、供びとをたくさん従えてやってきた。「ここはいづくとか申し

候」と尋ねると、「などかくは問ひ給ふぞ。肥前の国ぞかし」という。

なんと、肥前の国でも、ずっと奥の方の郡だと教えられる。びっくりした修行者は、国司の館へいくのだった一行について行き、船の便を探して、辛うじて京へもどった。異形の者が、「新しき不動尊、しばし雨だりにおはしませ」といって、かき抱いて据えたところが肥前の国だったとは。彼が異形の者に不動尊と見えたのは、不動の咒を唱えていたとき、それらの者が寺へ入ってきたからなのだろう。それにしても、百鬼夜行に行きあいながらの、それが不幸中のさいわいだったのか。

そういう怪異を語ってにおいて、作者は、そのあと、「芋粥」の話へ移っている。ふたつの話には、内容的には、それと知らされずにいきなり遙かな遠国へ連れていかれた、という以外のつながりはない。鬼の話をしてきて、いきなり遠国へ連れていかれた話ならば、「利仁芋粥の事」を連想する。そちらは、地方の豪族の、中央の貧しい中層貴族には想像できなかった繁栄ぶりを語るのである。幻想的な怪異譚のあとに、まるで違う世間話が出てくる。思いきった局面転換をはかっては、連想の糸で話をつないでいく、『宇治拾遺』の作者の説話集構成の手法について、わたくしは、以前、「中世的諷刺家のおもかげ―『宇治拾遺物語』の作者―」(『文学』三四の二二、一九六六年二月)で、この集冒頭の数話を問題にした。この「芋粥」の話にしても、『今昔物語集』巻第二十六では、

陸奥守に付きし人、金を見付けて富を得たる語 第十四  
能登の国の鉄を掘る者、佐渡の国に行きて金を掘りたる語 第

十五

鎮西の貞重の従者、淀にして玉を買ひ得たる語 第十六

利仁の將軍若かりし時、京より敦賀に五位を將て行きたる語 第

十七

というふうには、遠国致富譚が並んだなかにある。内容に即して類をもって集めていく『今昔』の作者に対しては、驚きを感じることはない。相手は常識的操作をしているにすぎない。ところが、『宇治拾遺』の方の説話の配列には、端倪すべからざるものがある。

### 「芋粥」ばなしのあと

『宇治拾遺物語』巻第二の第一話は、「清徳聖、奇特の事」という話になる。今は昔、清徳聖という聖がいたが、母親が死んで、愛宕の山に据えたその棺の回りを、千手陀羅尼を片時も休むことなく誦してめぐること、三年であった。寝ることせず、物を食うこともせず、声を絶やすことがなかった。三年目の春、夢ともなくうつつともなく、ほのかに母の声がして、陀羅尼をよんでもらったおかげで男子に変生して、天上界にいたが、いまは仏になった、という告げがあった。聖は、「さ思ひつる事なり。今は早うなり給ひぬらん」といって、母の棺を火葬に付し、卒都婆を立てて、山を下り、京へ出た。

京への道々、西の京に水葱なまきがたくさん生えているところがあり、むやみと腹がすいたので、それを貪り食っていた。その土地の持ち主が見ていると、三町歩ほども植えてあった水葱を残らず食べた。白米を一石こく、飯に焚いて食わせると、「としごろ物も食はで、困まうじたるに」といって、それも残らず食った。その話を人づてに聞いた右大臣藤原師輔が、不思議に思おもって、結縁けつえんのため物を差しあげたい、といいって呼んだ。たいそう尊うやげな聖がやってきた。そのあとに、餓鬼・畜生、虎・狼・犬・鳥、数万の鳥獸が歩みつづいてくるのが、他人には見えず、師輔公だけに見えた。白米十石を焚きあげて食べさせると、あとに従したがってきたものどもがすっかり食べた。聖は少しも食くべないで、喜んで退出していく。他の人の眼には、聖ひとりで食くべたように見えていた。大臣も、ただびとではなかったのだ、仏などが変かじて現まわれておられるのか、と感じ入いった。

さて、邸を退出して、歩きながら、四条の北の小路に糞をひつた。聖のあとについていくものどもが、まるで墨のようにまっ黒い糞を隙もなくずつとしちらかしたので、町の人たちはきたながつて、「糞の小路」と名づけた。帝がそれを聞いて、あまりにも汚い名だ、「錦の小路」にせよと仰られ、それから、錦の小路ということになったのだという。

この「清徳聖、奇特の事」は、三年の孝養を貫いたとみえた浄行聖が、実は餓鬼どもにとりつかれてしまっていた、という話だが、四条の北の小路が餓鬼どものひりちらした糞でいっぱいになったと

は、グロテスクで、壮絶とさえいえる笑話である。巻第一の最後の話、「利仁芋粥の事」とどうつながっているのか。そちらの話の終りの場面の、

……五石ごくなほの釜を五つ六つ舁かき持もて来て、庭に杭くわども打ちて、据たゑ渡わしたり。何の料ぞと見る程に、しほぎぬの襖あせといふもの着て、帯して、若やかにきたなげなき女どもの、白く新しき桶に水を入れて、この釜どもにさくさくと入る。何ぞ、湯沸わかすかと思れば、この水と見るは味煎みせんなりけり。若きをのこどもの袂たもとより手出したる、薄らかなる刀の、長やかなる持もたるが、十余人ばかり出いで来て、この芋をむきつつ、透すまじり切きれば、早く芋粥煮なるなりけりと見るに、食ふべき心地もせず。かへりてはうとましくなりにけり。

さらさらとかへらかして、「芋粥出いでまうで来きにたり」といふ。「参まらせよ」とて、まづ大なる土器かほらけ具ぐして、金かねの提ひさげの一斗とうばかり入りぬべきに、三つ四つに入れて、「かつ」とて持もて来きたるに、飽ひともきて一盛ひともりをだにえ食くはず。「飽ひともきにたり」といへば、いみじう笑わらひて、集ありて居ゐて、「客人まろうど殿の御徳に芋粥食くひつ」と言いひ合あへり。

というところ、五位は一杯も食べえないで、もう腹いっぱいだと音を揚げ、利仁の邸のものたちが集あまり食くらう、そのイメージが、次の清徳聖についている餓鬼たちの話を誘いい出いしているのらしい。

ついでにいえば、文中の「かつ」を、「さあどうぞ」(『日本古典

文学全集』本、注)などと解くのはどうか。「まず、少々」という意味であろう。(その理由は、「かつ」という語全般の論にわたる必要があるので、いまは省くけれども。)

「清徳聖、奇特の事」の

……結縁けちえんのために物参らせてみんとて、呼ばせ給ひければ、いみじげなる聖歩み参る。その尻に餓鬼、畜生、虎、狼、犬、鳥、数万の鳥獸ちようぶつなど、千万と歩み続きて来けるを、異人ことひとの目に大方見えぬ。ただ聖一人とのみ見けるに、この大臣おとど見つけ給ひて、さればこそいみじき聖にこそありけれ。めでたしと覚えて、白米十石をおものにして、新しき蒞むじろこ菰むぎに折敷、桶、櫃ひつなどに入れて、いくと置きて食はせさせ給ひければ、尻しつに立ちたる者どもに食はずれば、集りて手をささげみな食ひつ。聖は露食つゆはで、悦びて出でぬ。

という餓鬼どもが代りに集まり、食らう、シーンが、作者の中では連想でつながっているようだ。

「利仁芋粥の事」は、いきなり遠国へ連れていかれた男のイメージで、まえの「修行者百鬼夜行にあふ事」とつながり、多数のものが集まって、本来食らうべき人の代りに、途方もなく多くの食物をたいらげてしまうイメージで、そのあとの「清徳聖、奇徳の事」へつながっている。「芋粥」の話が、全体としてどういう種類の話だから、同類の話といっしょにしてある、というような説話の集め方になってはいない。百鬼夜行の怪奇譚から地方豪族の致富譚へ、さ

らに驚くべき糞尿譚へと、おもしろおかしい話がまじめな世間話になり、すぐにまた、おもしろおかしい話へと落ちていく。

清徳は、「いみじき聖にこそありけれ」と師輔にさえ見えていて、実はそうではなかった。餓鬼どもに憑りつかれて、その傀儡となつてにすぎない。ところが、次にくる巻第二の第二話、「静観僧正雨を祈る法験の事」は、日照りのとき、僧正が祈祷でみごと雨を降らせた、ほんとうの験げんがある貴い僧の、しごくまじめな話にもどっている。

今は昔、延喜の御時、旱魃かんぱつしたりけり。六十人の貴僧を召して、大般若経読ましめ給ひけるに、僧ども黒煙くろけりを立てて、験現さんと祈りけれども、いたくのみ晴れまさりて、日強く照りければ、御門みかどを始めて、大臣公卿、百姓人民、この一事より外の歎きなかりけり。

とはじまるこの話は、

藏人頭くらうぢゆうを召し寄せて、静観僧正に仰せ下さるやう、「ことさら思おぼし召さるるやうあり。かくのごと方々に御祈どもさせる験しるしなし。座を立ちて、別に壁のもとに立ちて祈れ。思し召すやうあれば、とりわけ仰せつくるなり」と仰せ下されければ、静観僧正、その時は律師にて、上に僧都、僧正、上臈どもおはしけれども、面目限なくて、南殿の御階より下りて、屏のもとに、北向に立ちて、香炉取りくびりて、額に香炉を当てて祈請し給ふ事、見る人さへ苦しく思ひけり。

というふうに行進し、法驗譚の常套をふんで、

熱日の暫しもえさし出ぬに、(暑い日ざしではばらくも外には出られないほどであったが)涙を流し、黒煙を立てて祈請し給ひければ、香炉の煙空へ上りて、扇ばかりの黒雲となる。

上達部は南殿に並び居、殿上人は弓場殿に立ちて見るに、上達部の御前(前駆)は美福門より覗く。かくのごとく見る程に、その雲むらなく大空に引き塞ぎて、竜神震動し、電光大千界に満ち、車軸のごとくなる雨降りて、天下たちまちにうるほひ、五穀豊饒にして万木果を結ぶ。見聞の人帰服せずといふなし。帝、大臣、公卿等随喜して、僧都になし給へり。不思議の事なれば、末の世の物語にかく記せるなり。

という結末になっていく。そのまえの話、「清徳聖、奇特の事」の糞尿譚と趣がガラリと変っている。作者は、あの糞尿譚も、聖は餓鬼どもに憑りつかれ、その傀儡になっていた、とわたくしの批評するように、一概に悪くは見えないらしい。三年の母親の棺を回りつづけた難行も、そのあと餓鬼どもを率いて京へ出てきたことも不思議であり、師輔の眼に、「尻に立ちたる者どもに食はずれば、集りて手をささげみな食ひつ。聖は露食はで、悦びて出でぬ。さればこそただ人にはあらざりけり。仏などの変じて歩き給ふにや」と写ったのも、施餓鬼の神妙なるまい、「奇特」のわざと評価されているようである。その点で、純粹に験ある僧静観の加持の話とつながっていく、と見える。出家人の「奇特」と「法驗」が作者の脳中の

連想の糸でつながっていき、この説話の配列をつくり出しているのであろう。

### 真俗交談の説話集

次の巻第二の第三話は、「同僧正大嶽の岩祈り失ふ事」で、同じ静観の話をつづける。『宇治拾遺』としては珍しいことであるが、そのなかみはこうなっている。

今は昔、静観僧正は、叡山の西塔の千手院というところに住んでいた。ここは南は大嶽(大比叡)に面している。その大嶽の西北の端に大きな巖がある。それは、

その岩の有様、竜の口をあきたるに似たりけり。その岩の筋に向ひて住みける僧ども、命もろくして、多く死にけり。暫くは、いかにして死ぬるやらんと心も得ざりける程に、この岩のある故ぞと言ひ立ちにけり。この岩を毒竜の巖とぞ名づけたりける。これによりて、西塔の有様、ただ荒れにのみ荒れまさりけり。この千手院にも人多く死にければ、住み煩ひけり。

という厄介な存在であった。これに、静観が立ち向かう。

この巖を見るに、まことに竜の大口をあきたるに似たり。人のいふ事は、げにもさありけりと、僧正思ひ給ひて、この岩の方に向ひて、七日七夜加持し給ひければ、七日といふ夜半ばかりに、空曇り、震動する事おびたし。大嶽に黒雲かかりて見えず。暫くありて空晴れぬ。夜明け、大嶽を見れば、毒竜巖砕けて散り失

せにけり。それより後、西塔に人住みけれども、崇なかりけり。静観は、広い空間をへだてた毒竜の巖を法力で打ち砕いた。まえの祈雨法験譚と同じ人の話だが、作者が、この話を次にもってきたのは、それよりも、まえの話の、

涙を流し、黒煙を立てて祈請し給ひければ、香炉の煙空へ上り、扇ばかりの黒雲となる。……かくのごとく見る程に、その雲むらなく大空に引き塞ぎて、竜神震動し、電光大千界に満ち、車軸のごとくなる雨降りて……

という香炉の黒煙が、空へ上って扇ほどの黒雲となり、見る間に大空をおおいふさぐほどにひろがる、と法験たちまち現われて豪雨となる、あのシーンのイメージが、こちらの話の、

七日七夜加持し給ひければ……大嶽に黒雲かかりて……毒竜巖砕けて散り失せにけり。

のシーンのイメージと通じあっているからではあるまいか。

同じ人が、加持の力で大空をふさぐ黒雲を現出させ、大自然を動かす、という点が、連想をゆるしているように考えられる。しかも、この話の方の毒竜巖破碎は、同じ法験譚でも、勇壯極まる悪魔退治で、尊厳な宮廷での祈雨とは違ってかわった趣である。そして、「それより後、西塔に人住みけれども、崇なかりけり」というところから、そのまた次の話、第四話、「金峯山、薄打の事」がひっぱり出される。こちらは崇りがちゃんとあった話である。真反対になっている。

今は昔、京の七条に薄打がいて、吉野の御嶽に詣でた。金朋を通ったとき、まことの金と見える石が転っていたので、嬉しく思つて、袖に包んで家に持ち帰った。秤にかけてみると十八両もあつた。七、八千枚もの金薄に打った。そのころ檢非違使をしている人が東寺の仏を造ろうとしていて、薄を多く求めている話があつて、持参し、その人のままで包をひろげて見せると、なんと、そのすべてに小さな文字で「金の御嶽」「金の御嶽」と書かれていた。これはただごとではないということになって、男は檢非違使の別当のところへ引き立てられ、拷問を受けて、入獄、十日ばかりで死んでしまった、という。薄は金峯山に戻された。それからは恐しくて、その金を盗もうとするものはなかった。

聖地から盗み出した金塊、もとより文字などあるはずのない原鉱石から造った金箔に、文字が浮き出していて、聖地の物を盗み出した所業が露顯した。崇があつた、という話である。毒竜巖の破碎で崇りを受けなかつた話と対をなして、崇りの有無の点で連想されている。

このように、連想が次々の話をひき出していく構造の説話集は、古代・中世には珍しい。『今昔物語集』が、内容的に同類の話を集めていることは、まえに触れたが、『宇治拾遺物語』に先行する説話集でいえば、『古事談』は、「王道后宮」「臣節」「僧行」「勇士」「神社仏寺事」「亭宅、諸道」という分類を立てて説話を集めており、後続のものについていえば、『古今著聞集』も、「神祇」

「釈教」「政道忠臣」「公事」「文学」「和歌」「管絃歌舞」「能書」「術道」「孝行恩愛」「好色」等々の部類分けをしている。

『十訓抄』は、

第一 可定心操振舞事

第二 可離僞慢事

第三 不可侮人倫事

というような徳目を立てて、説話を配列している。『続古事談』は、『古事談』にほぼ倣うかたちになっている。『宇治拾遺物語』が、どれくらい当時の説話集として異色のものであるかは、比べてみてはつきりする。

渡辺綱也・西尾光一校注の『日本古典文学大系』本の解説（一九六〇年）が、その点をめぐって、

……本書は全くの雑纂形態の説話集ではあるが、通読していくと、多少の説話の類聚性があることに気づく。

説話冒頭の形式句として、「今は昔」八三話、「是も今は昔」

六五話、「昔」三三話、「是も昔」三話が用いられ、他に直接書

き出したもの一三話があるが、その分布状態をみると、第一六一

二三話が「今は昔」、第二四一三三話が「昔」、第三六一三九話が

「これも今は昔」という風に、大体群落をなしている場合が大多

数であり、内容的・伝承的にもある程度同質性が認められる。

大胆に推測すれば、編者が説話を収録する際それぞれの群落を、ある一定の期間に、ある共通の伝承様式で収録したと関係が

あるのではなからうか。

このことと関係して、直接連続する一つづきの説話の間に種々の素材的・内容的共通性が認められる場合もあり、これも、編成の際の編者の心理的・時間的連続性や一貫性を示すものではないかと考えられる。また連続した二話または数話の間に、連想によって素材や発想法が推移発展しているのではないかと認められる場合もある。（五二・五三、七四・七五、一五五・一五六、一七二・一七三話など参照）

といているのは、研究者のある時点までのおおかたの見方を代表している、といえようか。

小林智昭校注・訳『日本古典文学全集』本の解説（一九七三年）も、

『宇治拾遺』の約二百編は、一定のきまりをもってまとめられたものではなく、いわゆる雑纂形式であり、かくべつ整然たる組織と秩序をもって構成されているわけではない。しかし前の類別表を見ても判るように、そこには同類的な内容が数条にわたって続く箇所があり、ちょうど後の『徒然草』にみるような、連想的にまとめる類纂の意図は確かに読み取られる。

と、雑纂説をとる。類纂の意図もほの見える雑纂という。小林氏がいう連想的は、類纂につながっていく、内容的同類性による連想的ということ、わたくしのいう連想とは違うものである。

わたくしは、『宇治拾遺物語』の連想の糸に導かれての奔放な話の展開の仕方は、当時の口で語られた説話のへ巡り話の形式（言



談の風景」『説話文学研究』第十五号、一九八〇年六月）とかかわっており、その影響を受けている、と考えている。またともに仏教の尊さを主張する仏教説話の次には、世俗のまるで違う世界の話、世俗説話がきて、さらにまた仏教説話にもどっていく構造は、人から人へ、話し手、発想をかえての語りつぎのおもしろさを、独りで演じていったものとして興味を寄せている。

同じおおせい寄っての△巡り話▽にも、真俗交談ということがあ  
る。出家と俗人混淆の談話会である。この形式に近いとも考えはじ  
めている。『群書類従』に、建久二年（一一九一）九月十日の重陽  
の節に催された座談会の記録、『真俗交談記』がある。前権僧正定遍、  
仁性律師、覚秘律師、澄覚阿闍梨、心覚阿闍梨、権中納言親経、参  
議資実、従三位為長、大蔵卿有家らが参加し、こもごも寺家・宮廷  
の古事・故実を語り合っている。

前に引いた『日本古典文学全集』本の小林氏の解説は、そのまま  
の方で、

これまでの用語に従い、仏教説話に対して日常的、現世的な仏  
教色のないグループを世俗説話と呼ぶなら、『宇治拾遺』の過半  
数を占めるのはやはり後者である。この二つの説話群によって

『宇治拾遺』を類別し、統一することもいおうのであ  
り、むしろそれが今日までの一般的な通説でもあるが、ここには  
もう一つの部立ぶだてを設けておきたいと思う。すなわちこの両者の混  
淆説話ともいうべき一群であるが……

これまで仏教説話といわれるものの中には、この種のものがか  
なり多く含まれるが、それにしても世俗と仏教、世間と出世間と  
いう次元を異にするはずの両者が、こうして説話というジャンル  
の中で交錯し混淆するというのは、いったいどういうことなので  
あろうか。

と自問し、唱導説法の場の説話がそういう性格に近いという結論を  
提出している。わたくしは、その唱導説法で解決することは適切と  
考えないし、混淆説話というものをあえて考えることもない、とい  
う意見だが、小林氏の仏法と世俗の間を往反する『宇治拾遺物語』  
の作者に注目しているところには、共鳴している。問題は、いかに  
その両者の間を往反しているかであるが、次の機会をえて、  
芥川の「鼻」の原話となった「鼻長なが僧ぞうの事」がある巻第二の第七  
話の前後に触れながら、以前の「中世的諷刺家のおもかげ」での論  
を、さらに伸ばしてみたい考えである。（文学部教授）